

東方虚像録

紅魔館の下っ端

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある所に嘘を付くのが得意な男がいた。

彼の周りの人々はその嘘の技術を恐れていた。

が、ある日、彼は遺書を書き残して自殺した。

だが、そんな彼の前に不思議な影が現れる――。

そして彼はその嘘の技術を持ったまま、化け物だらけの幻想郷へ招かれた。

目次

0話	プロローグ	1
1話目	殺陣 表裏	3
2話目	偽る程度の能力	9

0話 プロローグ

その男は『嘘』が得意だった。

どんな事であろうとも男は表情を崩さずに、笑いながら嘘をついてきた。

それこそ、男はまるで息を吸うように、平然と。

そして不気味な事に、その嘘を他人が疑う事は一切なかった。

嘘の神に魅入られた人間。

彼に騙された人々は、誰もが彼をそう評した。いや、そうでなければ説明がつかなかった。

男は楽しくなっていた。そして、更なる嘘を求めて進化していった。

その進化を続ける嘘の技術を人々は恐れたが、そのあまりの不気味さに、何もできなかった。

出来ることはただ一つ、疑う事だけだったが、男の言葉を疑えばそれが現実となり、男の言葉を信じればそれが嘘となる。

何をしても、どうしても、決して彼の言葉からは逃げられなかった。しかしある日、彼は遺言を残して首を釣った。

人々は最初こそ喜んだ。悪しき鬼は去った、と。

だがその遺言を見た時、人々の表情は一変して硬くなった。

【俺は死ぬよ。

でも、これは一体、『嘘』か『信』か、どっちかな？

本当にその死体は俺かな？

『嘘は信に』『信は嘘に』。

鳥は一度地に落ち、濁流を登りて龍となる】

その要領を掴めない遺言を見て、人々は色々な仮説を建てた。

『男は死んでいない』

『男は地獄から蘇る』

『男はーーー』

どれもこれも、彼の死を悲しむものでは無かった。彼の死を、不気味がる言葉だった。

当然だろう。彼は本当に不気味で、狡猾な男だったのだから。だが、その仮説の中に足りないものももう一つあった。

『そもそも、この遺言を書いたのは男ではない』

『さあ、君の名前を聞かせてくれるかな？』

何もない、本当に何もない空間に声が響く。青い人型のシルエツトが浮かび上がり、寝ている『彼』に優しく話しかける。

『騙す……それはとつても素晴らしいものだ。君の『ソレ』は、もはや能力と言つても過言ではないよ』

返事のない彼を見つめながら、シルエツトは揺れる。

それは自分の教え子を見るような優しい目。

『でも、現世じゃこれ以上の進化ができない。だから君に片道切符をあげよう』

シルエツトが空間に手をかざすと、そこに穴が開いた。禍々しい紫の穴が。

まるで異界と異界を結んでいるかのような不気味な穴の中は、毒々しい煙が息を巻いている。

『大丈夫、いきなり試練を与えるつもりはないよ。最初は簡単に生きて、時間をかけて鍛えるといい』

シルエツトは彼に背を向けると、そのままゆつくりと歩き出した。『【偽る程度の能力】……さて、蛇が出るか龍が出るか……それとも、それ以外の何かか』

そう言つて、シルエツトはその場から消え去った。

そして彼もまた、ゆつくりと消えていった。

1 話目 殺陣 表裏

「あー？どこだろうなあ、ここ」

肩まである白い髪、耳に付けてある黒いイヤホン、黒いシャツの上から微妙に長いコートを着て、黒い長ズボンを履いた男は、僅かに眉を潜めて呟いた。

嘘の代弁者、殺陣（たて） 表裏（ひょうり）は、暑い光を浴びせ続けてくる太陽を煩わしそうに見た後、下を見る。

そこにはおかしな光景が広がっていた。

まず、自分が乗っているのは地面などでは無く、木で作られた屋根だった。

彼は屋根などに登った記憶は無い。それどころか、今日は外にすらも出ていなかった。

次に、下を歩く人の服装だった。

着物や全体的に薄い皮の服を身に纏うその服装は、まるで遙か昔の人を見ているかのような。とてもではないが、今の時代では仮装以外の目的で着る事は無い。

最後に……なんだあれは。

一人の女が炎を掌で弄びながら、暇そうにあくびをしながら歩いている。手品師……ではなさそうだが、果たして何なのか。

とりあえず、この状況では何をする事も出来ない。と考えた表裏は一先ず下へ降りることにした。

「よっ、と」

屋根から降り立つ。

屋根から地面までの距離は対して無かったのか、耐えきれない程の衝撃はこなかった。ちよつとピリピリするだけだ。

表情にはそういったものは一切出さず、表裏は何事も無かったかのように辺りを見渡す。

やはりその目には同じ光景しか映らなかった。全体的に時代遅れのものしかない。

表裏は暫くキョロキョロと辺りを見渡し、完全に自分の知らない土

地だという事を再確認した後、頭を抱えた。

「何なんだよ」……」

頭を抱える表裏へ、何事かと思った人々の視線が集まる。

だが表裏にはそんな事を気にする余裕は無く、とにかく思考を回す。働かせる。

(なんだこれ、なんだここ？どうなってんだ……)

頭のキレる、とまではいかないが、これでも表裏は頭は良い方だ。大抵の問題は一人で解決に導ける。

だが今回のこれは、その頭脳を持ってしても正解へは辿り着けそうになかった。

いくら考えても分からない。そう判断した表裏は一人静かにため息を吐き、改めて立ち上がった。

彼の頭脳は正解を導き出せなかったまでも、道筋程度なら思い付いたようで、辺りを見渡すと同時に脳を回転させる。

まるで何かを吟味しているかのような鋭い目が、ある一人の女性の位置で停止した。

その女性は、表裏が屋根の上で見た時に、掌の上で炎を弄んでいた人だった。

彼女が表裏の目に止まった理由は無い。彼は最初に視界へ入った人間に狙いを定めただけのこと。

表裏は小走りで女性の元へ駆ける。
ただし、

「すみませーん、少し聞きたい事がー！」

声色を変え、女性のような高い声の状態で、だ。

彼は本当の自分を知られることを嫌う。それは、嘘を付いた時に、本当の自分が知られているとすぐにバレるから、である。

だから他人と話す際は、喋り方も、声色も、その気になれば性別だつて偽る。

だが今回は性別を変える事は不可能。だからせめて、声色と喋り方だけでも変えて話しかけた。

「ん？なんだ？」

だが、その白髪ロングヘアの女性は、その男には不釣り合いな声に対して何の疑問も持たなかった。

まるで当たり前と思っているかのように、平然と。

彼は気付いていなかった。

声を高めに切り替えた瞬間、自分の姿が『変わった』事に。

気付かない彼は、いつも通り嘘の声で話しかける。

「いえ、すみませんが、場所を聞きたくて」

「場所……？」

「はい、ここは何県のどこなのかを」

白髪の女性は少し首を傾げて、上空に？マークを作った。

「何県？なんだそれ、聞いたことないけど……」

「え？」

一瞬、表裏は素の声を出してしまった。

彼はそれに素早く気付き、振り払うように首を左右に振ってから、改めて目の前の女性を見た。

その時に目の前の女性は、片目を擦っていた。

目が合うと少し戸惑ったような表情を見せたが、すぐにキリツとした表情に戻り、目の前の女性も、改めて、といった様子で表裏を見た。

「すまない。それで、何だったわけ？」

「……ですから、ここが何県の何処なのか、を聞きたいんです」

うーんと唸りながら考える女性に対し、表裏は心の中でため息をついた。

ここは相当な田舎らしい。それこそ、自分の住んでいる場所が分からないレベルの馬鹿がいるくらいの。

とはいえ、彼は自分以上の知能を求めているわけでは無い。ただ、一般常識さえ通じてくれれば。

白髪の女性は一般的な知識すらも欠けているようだった為、表裏は呆れたのだ。

少しばかりの無言の後、白髪の女性は何かを思い出したかのように、俯きぎみだった顔を弾かれたように前へ向けた。

「あー！そういえば、人間の世界ではそんなものがあるって慧音から

聞いたことあるな！」

その言葉に表裏の眉が僅かに動いた。

目の前にいる白髪の女性が、まるで自分には関係ない、遠い国の事を思い出しているような雰囲気で呟いたからだ。

どういう事だろうか？

どんな田舎に住んでいようが、全く必要ない訳ではないと思うが。

「あー、という事はお前は『外来人』か。そりや場所を聞きたくもなるよな」

意味の分からない女性の言葉に、表裏は今度こそ首を傾げた。

が、すぐに結論を出す。

恐らくこの村では、他の場所から来た者の事をそう呼ぶのだろう、と。

「おっと、そーいや自己紹介がまだだったな。私の名前は藤原 妹紅、宜しく」

「え？ああ、はい。私の名前は殺陣 表裏です。宜しく……？」

場所を聞いただけで自己紹介なんかするものか？と表裏は疑問を持ったが、都会と田舎では考え方も違うのだろう、と表裏は自己解決して自己紹介した。

表裏の名前を聞いた女性・妹紅はうんと頷き、踵を返して表裏へ背を向けた。

「殺陣、お前は多分帰れない」

「……は？」

帰れない。

その言葉に表裏は反応した。

といつても、今度は素の声ではなく嘘の声で反応したわけだが、それはあまり重要じゃない。

帰れない。

その言葉が表裏の思考を早めた。

もし自分が外国にいようが、『帰れない』なんてことは無い。何処に自分がいようとも、決して帰れない訳ではない。

なのに、目の前の女性は言った。

帰れない、と

「説明が欲しいだろう？ だけどあいにく、私は説明するのが上手くない。だから人に説明するのが得意な奴の所に案内するよ」

そう言い、妹紅は歩き出した。

先程の言葉の意味が分からない表裏は、とりあえず着いていった。

—————

表裏が連れて来られたのは、村の中で一番でかい建物のある場所だった。小さい校庭のような場所もあり、まるで昔の学校、寺子屋のようだ。

妹紅は躊躇なしに建物の中へ入り、一番近くにあった襖を開いた。

「ん？ あれ？ 妹紅、どうかした？」

襖の奥にあったのは、小さな部屋。

畳六畳程度の部屋に置かれた小さな机の上で、何かしらの作業をしていたであろう女性は、妹紅を見て首を傾げた。

彼女の周りではプリントが山積みになっており、手にペンを持っている所を見ると、先程まで作業をしていたようだ。

妹紅は作業を邪魔したにも関わらず、悪びれる様子も見せないまま中に入って腰を下ろす。

「ほら座れよ、多分長くなる」

妹紅に促されるままに表裏は座る。

座り方は何も考えず、胡座だ。

表裏が座ると、机の前に座る青いメッシュの入った銀髪の女性が、妹紅へ視線を送った。

「妹紅、この人は？」

「殺陣 表裏。 外来人っぽい」

「外来人……」

銀髪の女性は自分で再度呟くと、表裏へ視線を向けてきた。

「外来人って……本当？」

「……できれば、外来人の意味を説明して下さいとありがたいのですが」

意味が分からなければ肯定も否定もできない。いくら表裏が知能に優れているとしても、聞いた事も無い言葉を0から分かる程ではない。

それを聞いた女性は『そうだったな』と呟き、座り直した。

「まず外来人というのは、まあ分かりやすく言うのだな……神隠しって知ってるか？」

「はい、あの、人間がいきなり居なくなるって奴ですよね」

「ああ。それじゃあ、その『神隠し』にあった人間は何処に行くと思う？」

「どっか。」

表裏は顎に手を当てて、考える。

神隠しは、名前通り神に隠されるという意味。ということは、それに近い言葉。

表裏は思い付いた言葉を放った。

「天国とか、その辺りですかね？」

その解答を聞いた女性は首を横に振り、人差し指で地面を指差した。

「正解は、『ここ』だ」

聞いた直後、彼・表裏の思考は止まった。

唐突に放たれたその言葉。

『神隠しをされた人間が来る場所』と問われ、正解が『ここ』。女性は表裏の思考が再起動する前に、両腕を組んで、言う。

「ここ『幻想郷』に迷い込んだ人間の事を、私達は呼ぶんだ」

『外来人ってな』

2 話目 偽る程度の能力

【老いる事も死ぬ事も無い程度の能力】

【歴史を食べる程度の能力】

二人は、能力という存在の事を教えてくれた。

能力とは、何らかの超常現象を引き起こしたり、自分の肉体を強化したりと、様々な事が出来る便利なものらしい。

最初は鼻で笑ったが、妹紅が目の前で首を切った後に再生したり、慧音が歴史を食って物が消えたりと、あらゆるものを見せてもらい、信じないわけにもいかなかった。

慧音は『さて』と呟き、改めて表裏を見た。

「外来人、そして能力の話は終わったな。そして次は……」

そこまで言い、続きを言おうとした慧音を妹紅が手で制し、妹紅が向き直った。

「外来人」【能力】の二つが揃っている人間について、だ」

その時、表裏は少し変な違和感を感じていた。

なぜそんな話をするのだろう、と。

自分が外来人というものである事は分かった。だが、それと能力に何の接点も見られない。

まるで、能力という力を持っている人間に対しての説明のような、そんな違和感がある。

妹紅は続ける。

「本来、外来人というのはすぐに帰してもらえる。博麗の巫女に頼めば、結界と結界をこじ開けて、いつでも帰れる」

「だけど、能力を持った外来人は話が別で、異質の力である能力が巫女の力を邪魔するそうだ」

「本来通れない結界を通る為に、相手に干渉して精密な力の流れを汲み取る必要があるみたいでな、そこに能力なんて異質が働いてしまえば、乱れるそうだ」

「……」

表裏は内心、僅かに苛つきながら話を聞いていた。

こんな話を自分にしてどうするのか。自分には関係の無い、能力を持った人間の話なんてどうでもいいから、必要な事だけ教えてくれ、と。

だが、表裏は『聞いている身』であるため、文句は言えずに黙っていた。

妹紅は表裏の心の声には気付かず、そのまま会話を続ける。

「能力を持たない外来人は帰れる。能力を持つ外来人は帰れない。つまりは、そういう事だ」

どういう事だ、と表裏は頭の中で突っ込む。

だが、次の妹紅の言葉に、表裏の目は見開かれた。

『「能力を持つお前は幻想郷で住むしかない」って訳だな」

「……………は？」

その時、表裏は素の声を出した。

その瞬間、表裏の体がブレた。

まるでテレビの砂嵐のような灰色の何かが、彼の体全体を覆い隠すように出現する。

『能力を持つ人間が帰れないから、俺も帰れない？何を言ってるんだ？』

その声も、甲高いような、低いような、透き通るような、よく分からない表現不能の声に変質していた。

その『異常』を見た妹紅は、やっぱな、と一言呟いて、鏡持った。

鏡を持って、それを表裏へ向ける。鏡に映ったものが見えるように。

鏡を見た表裏は数秒ほど無言だった。

表情は分からない。目を見開いているのか、それとも興味なさそうにしているのか、唾然としているのか。

ただ、表裏は少しして、凹凸の無い言葉で、こう言った。

『なんだ……………こりゃ……………？』

「能力、だ」

砂嵐のかかった頭が動く。

今の動作も、妹紅を見たのか、それとも現実逃避するために顔を逸らしたのか、分からない。

妹紅は言う。

「能力の詳細は分からない。でも、さっきまでお前の姿が見えていたことは確かだし、何か試してみたらどうだ？」

表裏は無言で、動かない。

だが、ほんの数秒ほど時間が経った時、変化が訪れた。

砂嵐が薄れ、中の人物が姿を現す。

砂嵐から現れたのは、銀髪の間人だった。

服装は質素な白く薄いTシャツ。

下半身にはネズミ色のジーパン。

目は大きく、瞳の色は薄い青。

胸部は僅かな膨らみを見せていて、腕や脚、肉体の殆どの部位に筋肉は無かった。

芯の細く、色の白い銀髪の『女性』が、そこにはいた。

「……こんな感じ、ですかね？」

鏡を見ながら、表裏は首を傾げた。

自分の姿を鏡でまじまじと見る表裏だったが、妹紅達は大きく驚いていなかった。

妹紅達は、表裏が演技で女のフリをしていた時に、ずっとこの姿の女性を見ていたからだ。

むしろ、妹紅達は『この姿が本当の表裏』で、何かしたから砂嵐で姿が隠された。と考えていた。

妹紅は一息ついて、口を開く。

「…分かったか？お前は『能力持ち』だ」

「……俄かには信じられませんが、実際に見て、使ってしまったのは、信じるしかありませんね」

「そうか……」

妹紅が話し終わり、次に慧音が前に出た。

その目は、興味深そうに表裏を見ていた。

「……お前みたいなのは、初めてだな」

「え？」

「能力を持った人間が来るのは今までで何人かいたが、大半は状況を

把握できずに、勝手に飛び出して妖怪に食い殺されていた」

その時、慧音の肩の力が緩んだように見えた。

恐らく慧音は、表裏も他と同じように飛び出すと思ったのかもしれない。

そしてそれを出来る限り止めるために、いつでも動けるようにしていた、と。

だが、表裏が妙に落ち着いていて、大丈夫だと判断した慧音は力を抜いた。

表裏は自分の身体のあらゆる箇所を確認すると、その目を慧音達に向けた。

「それで、私はこれからどうすれば？」

「その辺りは心配しなくてもいい。帰れない人間を見捨てるほど、私達はクズじゃない」

慧音はそう言うと、隣の妹紅へ目配せをした。

それを受けた妹紅は頷き、スツと立ち上がった。

表裏の横を通り過ぎ、言う。

「ついて来い、ある場所に案内するから」

「あ、はい」

表裏は妹紅についていく為に立ち上がり、部屋を後にしようとした。

ふと、表裏は何か気付いたように足を止め、慧音に顔を向けた。

「そういえば慧音さん」

「なんだ？」

「貴女の演技、うまかったですよ」

「……………」

「最後の最後に手際が良すぎるのさえなければ、貴女のミスはなかったんですがね」

そう言い残し、表裏は妹紅を追って廊下を走った。

—————

表裏と妹紅は寺子屋を出て、村の中心から少し横にずれた位置に立つ建物の前に来た。

その建物は寂れているわけではないが、何処と無く誰も住んでなさそうだった。

大きさはそこまですらなく、一般的な家の一部屋程度しかないように見える。

「とりあえずここを使って生活してくれ」

「いいんですか?」

「どうせ何もないんだろ?ならとりあえずここに住んで、生きていくうちに住みたい場所があったら移ればいいさ」

「……ありがとうございます」

一言お礼を言い、表裏は家の扉を開けた。

ギイイ、と音を立てながら開いた扉の奥には、何も無い空間が広がっていた。が、埃が積もっている所を見て、長いこと使われていないらしい事だけは分かる。

「……結構長いこと使われてないみたいですね?」

「ああ、ちよつとな」

言葉を濁した妹紅を見て、表裏は悟った。

この家には、多分何かある。

そう思った表裏は家の中を見渡した。

蜘蛛の巣の張った天井、床の隅に積もった埃、見忘れがないよう、じつくりと。

「おっと、そろそろか。じゃあ私はもう行くよ。何か困った事があれば、慧音の方に行ってくれ」

「あ、はい。ありがとうございます、妹紅さん」

妹紅はゆっくりと歩いて、表裏の前から消えた。

それを見届けた表裏は家の中に完全に入り、ギンギンと音を立てながら部屋の中央まで歩き、口調を変える。

「改めて見てみると……ひでエな」

表裏の身体を砂嵐が隠す。

そして中からは、本来の表裏が姿を現した。

「灯りも無い、埃は多くて寝転がる事も出来ねエ」

更には塵取りや箒といった掃除用品もなく、表裏は深いため息をついた。

この家に住む為には、この埃を出来る限りなくさなければいけないのだが、それができない。

雨風を一時的に凌ぐ小屋のような扱いは出来るかもしれないが、逆に言えばそれ以上のことはできない。

メインに生活する場所としては、環境が劣悪すぎる。

能力の事も考えたが、表裏は自分の能力がそういうものでは無いと、勘で悟っていた。

(能力……多分俺の能力は、嘘をつこうと思うことで、効果を発揮するもの)

寺子屋で自分の能力を見た時。

表裏は、何故かは分からないが、嘘をつこうと思った。

それはほとんど無意識で、女だと偽ろうと思ったのだ。

そして、姿が変わった。

女だと言おうとしたら、本当に女へ姿を変えた。

恐らく、表裏は能力を無意識のうちに酷使していたのだろう。

それを改めて意識して使おうとした時、無意識の断片が表に表れて、結果的に能力を酷使できた。

といっても、これは推測に過ぎず、確定ではない。

だが表裏は、この能力が掃除とかに使えるほど、万能でないことを悟っていた。

「はあ、めんどくせ」

表裏の身体を砂嵐が覆い、また姿を女性に変えて外へ出る。

あんな埃塗れの家にいれば、いずれ病気になってしまふ。

一度外に出て外の空気を吸った表裏は、家の周りを見た。

掃除に使える物があるかもしれないと思った上での行動だったが、

家の周りにはちよつとした雑草しかない。

表裏は空を見た。

そこには太陽があり、まだ暗くなる様子はない。

「……まだ時間はありますね」

表裏はキョロキョロと辺りを見渡し、一件の家に目をつけた。

表裏が目をつけた家の中から一人の爺さんが出て行き、それを一人の婆さんが見送る。

その二人の一部始終を見ていた表裏は、自分の姿を一瞥して、ニヤリといやらしい笑みを浮かべた。

「……テストでもしますか」

表裏の脳が、活発に動き出す。

「……………」

「あれ、爺さん。もう帰ってきたのかい？」

「おう、ちよつとな」

先程外に出て行った筈の爺さんが帰ってきて、不思議そうに首を傾げる婆さん。

しかし爺さんは婆さんに目もくれず、少し辺りを見渡し、何かを探していた。

不思議に思った婆さんが口を開く。

「何を探してるんだね？」

「筈だよ、筈」

「え？今から農作物の収穫じゃないのかい？筈なんて何に……」

「ちよつと不具合があつてな、とにかく筈が必要なんだが、はて、どこにやったかな？」

そう言いながら爺さんは家の中を歩き回り、倉庫らしき場所を覗いたりして探している。

その行動を見ながら、婆さんは苦笑しながら答えた。

「何をやってるんだ、もうぼけちゃったのかい？家の裏に掛けてあるだろう？」

「……んだよ、だったらわざわざ来る必要なかったな」

「ん？なんだい？」

「いや、何でもない」

一瞬、爺さんの身体が定まらなくなった。
婆さんは一度目をこする。

そして改めて目を凝らした婆さんの前には、誰もいなかった。

「…おや？」

取り残された婆さんは一人、啞然とした表情で椅子に座っていた。

—————

「だー……疲れた、精神的に疲れた……」

だが、これで表裏は自分の能力を把握することが出来た。
嘘をつけば自分を偽れる。

『偽る程度の能力』

表裏は笑っていた。

普段から人を騙し、嘘を信じ込ませてきた表裏に、うつつつけの能力。

気付けば、表裏は元の世界に帰りたいたいなんて思っていないかった。

表裏は、元の世界にそこまで執着していたわけではない。
能力を手に入れた今、むしろ帰る理由が消えた。

不気味な笑みを浮かべ、彼は箒を手にとった。

—————

「ぜえ、はあ……こんなんもん？」

表裏は疲れた表情で、すっかり綺麗になった床の上へ座り込んだ。
掃除を決行してから三十分。

ずっと動き、やっと埃から床の主導権を奪い返した表裏は、汗で張り付いた服をパタパタ仰ぎながら、天井を見た。

そこには、まだ撤去していない蜘蛛の巣。

つまり、次は天井の支配権を取り戻さないといけないのだが、残念なことに背が小さくて届かない。

因みに、表裏は何故か女性の姿である。

その姿で薄い服をパタパタさせる姿は、なんか無駄に色気の出てる。しかし本人は男のため、それにドキツとした人間は例外なくホモである事を主張しよう。

表裏はそのまま、あー、と呟き、両足を組んで床に寝転がった。

「めんどくさい」

そして数分後。

掃除の終わった家の中から、女の寝息が聞こえてきた。